

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. **54**

サリュ
フランス語で致いの意

應典院寺町倶楽部のニュースマガジンサリュ通巻54号2007年秋号

複製デザイン

サリュ32号から42号(2004年2月)まで使用していた時代のです。



この「無縁」の語をもって、日本中世の「自由」を表現する事は決して根拠のないことではない、と今も私は考えている。そしてその意味での「無縁」—「自由」の原理は、やはり勳進上人にも、遍歴する職人・芸能民の場合にも働いていたと思うのである。もとよりこれらの人々がすべて自らを「無縁」と意識していた、などとは私も考えていないが、上人はやはり原理的には仏陀のみにつながる人々であり、職人・芸能民の遍歴の自由を保証したのが、中世前期には、天皇・将軍のような統治権者であり、また神仏そのものであったことに注意しておかなくてはならない。

網野善彦「増補 無縁・公界・楽 一日本中世の自由と平和」(p371-372)

2007.November

Salut 32



2002.6
(32)

Salut 33



2002.8
(33)

Salut 34



2002.10
(34)

Salut 35



2002.12
(35)

Salut 36



2002.2
(36)

Salut 37



2002.4
(37)

Salut 38



2002.6
(38)

Salut 39



2002.8
(39)

Salut 40



2002.10
(40)

Salut 41



2003.12
(41)

Salut 42



2004.2
(42)



1975年大阪生まれ。大阪芸術大学在籍中に作家・棚瀬美幸、舞台美術家・柴田隆弘らと劇団「南船北馬一団」を旗揚げ。2004年から3年間大阪府立プラネット・ステーションで青少年が企画・運営するイベントをコーディネートする傍ら様々なアートイベントに精力的に参加。2007年5月より財団法人大阪21世紀協会 御堂筋パレード担当プロデューサー就任。

元々、堺育ちでして、高校に入ってすぐにたまたま演劇部に入ったんですね。折しも、関西が小劇場ブームであったのも、要因かもしれません。前の職場のプラネットステーションとの繋がりが高校からでした。

「演劇」というアートとの出会い

「場」と「機会」、
出会いのコーディネート
——実践するアートマネジメント——

南船北馬一団を旗揚げ以来、一貫してコーディネーターとして、人を繋ぐ仕事にこだわり続ける古谷晃一郎さん。今春、プラネット・ステーションから大阪21世紀協会にうつり、ますます、その活動の幅を広げて行く。これまでのコーディネートと、今後の展望についてお聞きしました。

プロデューサー 古谷晃一郎さん

財団法人大阪二十一世紀協会

身体によって
善行を行なえ

身体がむらむらするのを、
まもり落ち着けよ。
身体について慎んでおれ。
身体による悪い行ないを捨てて、
身体によって善行を行なえ。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター
サリュ
Vol.54

Top Interview

「場」と「機会」、
出会いのコーディネート……………1

特集・演劇と應典院
世代を超える知の継承と共創
スペースドラマ2007を
振り返る……………4

SABOKUJI ENDOU,
優秀劇団インタビュー……………10

クロージングトーク紙上再現……………12

寺子屋トーク、50回。
出会いと気づきと学びと交流の場を求めて
1997→2007 10年の軌跡……………16

5年目を迎えたハイスクール・プレイ・フェスティバル
高校生の舞台に
〈生きるための演劇〉
の原点を見る……………20

應典院10年史(3)
アート・ミーツ・應典院
應典院が持ったもうひとつの面貌……………24

築港ARCイベントレポート【特別編】
ARC Audio!!……………28

公開録音キャンペーンライブ
「ひと」と「場」の交差点
應典院につき……………30

その後、演劇に強く惹かれ大阪芸大の舞台芸術学科に入学し、本格的に舞台の勉強を始めました。

とにかく、その頃は、いろんな場所との出会いが大きかったんです。人が集まって来る場所への魅力といえますか、劇場という場所には色々な人がいて、その魅力を体感していた時期でもありました。

在学中に、プラネット・ステーションでの高校演劇祭のスタッフとともに、南船北馬一団を96年に旗揚げし、小劇場の世界に。当時、プラネットのプロデューサーをしていた餘吾康雄さんとの仕事を通じ、影響を非常に強く受けていた時期でしたね。そのご縁で應典院さんとの出会いもあったわけですね。

應典院との出会い

新たなアートへの興味

97年に初めて應典院で公演をするわけですが、はじめは「何や、ここは」って感じてましたね。劇場にご本尊があるし、円形だし。ただ、スタッフや役者

には使いづらい空間かもしれないけど、不思議と自分にとっては、落ち着く空間でした。いろいろな可能性や創造性を感じた記憶を留めていますね。

なので、できたばかりのこの場所を劇場として良くしようという想いから、協力劇団としてかわらせてもらうようになりました。

その後、数年間、照明会社に勤めながら劇団をやっていたんですが、体調を崩し、その療養をかねて沖縄の宮古島に渡ったんです。ゲストハウスを手伝いながら居候させてもらって：十ヶ月強にもなりませんが、その中で、何かを得たような気がしました。今では、感覚として、宮古島がふるさとのような感じですね。

大阪に帰ってきて、宮古島の影響だけではありませんが、それまでお芝



2000年、南船北馬一団のみんなと@カラビンカ

居だけだったものが、それ以外のアートへと視野が開けていきました。が、逆にさまざまな表現やアーティストとふれあうことで、自分の中でお芝居の位置づけがわからなくなってきたんですね。お芝居以外の表現の面白さが見えてきたといえますか、そのうちに、「劇団員」という枠に違和感を感じ、南船北馬一団に外からかわることの方が自分ができることは多いのではないかと思います、2003年に退団しました。この時期ぐらいから、よりアートを強く意識しました。

そして、2004年4月からプラネットのコーディネーターに就任し、運営全般を仕切るようになりました。一年目は、「何かせなあかん」という想いだけで走った一年。二、三年目は比較的落ち着いて事業に取り組めたので、一過性のイベントには出せない厚みのあるワークショップを数多く企画・運営できました。それは、自分や参加者の中に何かを残そうという想いからなのですが、それを通じて、やっとな自分の立ち位置が見えてきたという感じでした。

これからの展望

でも、三年目の最後に指定管理者制度の影響でプラネット事業自体の運営が大きく制限されるということもあり、次のステージを求めて大阪二十世紀協会にうつりました。

今まで比較的、手で触って直接感じられるイベントをやってきたので、大阪二十世紀協会です。イベントを動かす仕組みを知ろうと思っています。

そのノウハウをプラネットで作った経験と合わせる事で、よりアーティストやクリエイターたちが表現の幅を広げられるような仕掛けを考えていければと思っています。

そして、これからもいろんな人と出会う場所や機会を生み出していきたいと考えています。

(構成・城田邦生／應典院主務)

スペシャルトーク スペースドラマ2007を振り返って



【ゲスト】

伊藤拓さん

【France_pan 主宰】

西島宏さん

【應典院寺町倶楽部専門委員（演劇担当）】

山口洋典

【應典院寺町倶楽部事務局長・應典院主幹】

今年も七月から八月に開催された應典院真夏の演劇祭スペースドラマ。総勢六劇団が集い、プレイアートの競演を魅せました。このスペシャルトークでは、今年の協働プロジェクト「フランス劇団「France_pan」の主宰である伊藤拓さんと應典院寺町倶楽部専門委員・西島宏さん、應典院主幹・山口洋典さんをお招きし、今年のスペースドラマを振り返りながら、今までとこれからのスペースドラマを語り合っていました。

— 今年の space x drama の印象や感
触はいかがでしたでしょうか。

伊藤●今年は、たとえば突劇金魚さんや旧劇団スカイフィッシュさんなど、他でも観たかった劇団さんが集まって、さまざまな劇団の特色が見れた演劇祭でした。あと、特筆すべきは、参加劇団のリレープログラム、劇評ブログが存在していて、演劇祭としては異例の盛り上がりを見せたこと。全国的に見ても珍しいことだと思います。また、プレイイベントやアフタートークのあとの飲み会などで、参加団体同士の横のつながりが深まった演劇祭でもあったという感想です。

西島●凄くカラーのはっきりした劇団が集まっていたので、制作部門で一緒にできるのかなと不安がありました。

たが、杞憂に終わりました。いつのまにか、参加劇団のみなさんが粛々と演劇祭を創ってくれたのがありがたかったですね。

山口●きれいな演劇祭の形を見たという感想ですね。まず、France_panさんが制作面や舞台運営など、優秀劇団としての存在感、格の違いつてもいいですか。それを示しながら、演劇祭としての一体感や連帯感をブログの運営などを通じて見せてくれたように思います。

西島●完成してたよね。この五年間の space x drama の集大成という観さえあった気がする。

山口●去年の蓄積をしっかりと形にできましたね。去年、掲示板だったのが、ブログという形になったという風に。次の課題は、今度は、劇団員

や役者さんたちも巻き込んだ形での協働をどう展開するかが軸になるのではと思っています。

— 実際、伊藤さんは二年連続で参加して、いかがでしたか。

伊藤●去年は「France_pan」としても、とりあえず参加するのが目的だったような気がします。位置づけが曖昧



2007年、France_pan「貝を棒で」より @ 應典院



伊藤拓
France_pan 主宰／作・演出

自劇団の創作活動のみならず、今春からは、平田オリザ監修「若い演劇人のための基礎講座」を手がける。

で、周りが見えていなかったというのが正直なところ。今年になって、どうしたら関西の演劇界全体を盛り上げていけるのか考えられる視野を持てるようになりました。その中の「space × drama」を捉えたかったというのはあります。劇団をやっていると視野が狭くなってしまふんですね。ですので、このspace × dramaを通じ、劇団同士がいろいろなもの共有をできたらと思っただけです。そう考えると、ブログでの互

いへの劇評や劇団同士の交流も含めて、上手いことでは、と思っっています。自分たちの公演としては、優秀劇団ということで、選んでいただいた應典院さんを意識していましたね。そこに関しても、ある一定の成果は出せたのではと思っっているのですが。

山口●僕らからすると、情報交換がそれぞれで進めば良いなという想いがあつたんです。逆にいうと、それぞれの得意分野をどう出してもらうかが主催者としての使命だと思っっているんですね。先ほど、西島さんがカラーがはっきりしているとおっしゃっていたんですが、ということ、バラバラになりかねない要素を含んでいる。が、しかし、違うからこそ学ぶ部分がある。経験の略奪と言いつても良いかもしれませんが、そう

いうなかで、違いを認め合いながら、共通のルールを創っていただけのこと。が今回は素晴らしかった。制作者会議で手の内を見せ合いつつ、おのずと互いに助け合う土壌ができていたように思います。France_panさんに関しては、應典院を意識した公演とおっしゃっていましたが、そこに関しては、実は如実に感じていた訳ではなく、逆に我々は心地よくその世界に引き込まれていたような気がします。良い意味で、抵抗感のない空間ができた気がついていたように思います。

西島●新しい取り組みとして、イベントをしましたが、制作者だけじゃなくて、お客さんも含めて役者同士のコミュニケーションがはかれたように思う。他の演劇祭では、見れない試みだった。

山口●それも実は、劇団さんからの提案から始まっていることで、他の演劇祭では環境を与えられるが、應典院の場合は、環境をつくれという感じですね。乱暴といえば乱暴ですが、それが良い相乗効果を生み出しているように思います。

— 西島さんにお伺いしますが、應典院寺町倶楽部の演劇担当の専門委員として、また應典院ブレンとして、この五年間のspace × dramaを見続けて、運営面や参加団体の変化などを感じましたか？

西島●参加団体に関していうと、如



西島宏
應典院寺町倶楽部専門委員（演劇担当）

應典院再建時より、ブレンとして、演劇部門のコーディネーター、プロデュースに携わる。

実に弱くなってきている気がします。旗揚げ劇団が減ってきているのも含めてなんです。例えば、劇団といつても、劇団員が二、三人しかないとか、昔に比べて劇団の基礎体力が落ちてきているように思います。西島さんがおっしゃるように、関西小劇場の全体を考えたときに、新しいムーブメントが生まれでてくる感覚が弱くなってきたんじゃないかと。どうですかね？

伊藤●僕らも五年前の事まではわからないのですが、そういう感覚はどこかで持っているの、自分たちなりの方でムーブメントは起こしていきたいとは考えています。

山口●公の演劇や文化に対する施策が、すでにやっている人を伸ばすことに力点を置きすぎて、これからはじ

める人を生み出す環境を創ってこなかった気がしています。例えば、立派な劇場をつくる。が、そこでの人間は少ないじゃないですか。むしろ、小さなところでゴチャゴチャやってた方が、ムーブメントとしては盛り上がる。当時、中堅だった人たちが伸びた五年だったとすれば、そのストーリーの中で、これからの人たちが置いていかれた感があります。NPOも一緒なんです。それまでは、何かをしようと思んなが寄ってゆつくりとはじまっていたものが、今は、いきなり組織として立ち上がってしまうんです。つまり、モラトリアム段階がないんです。それは、組織として成り立たないと、援助できないという制度の結果なんです。その反転で、任意のグループができにくくなって

山口洋典
應典院主宰

2006年4月より、應典院主宰に就任。以降、應典院全事業の統括を務める。應典院寺町倶楽部事務局長も兼任。

るんです。演劇に引き戻せば、劇団ができる前の集まるきつかけや場がなく、劇団になつていないと何かに関わっていけない環境に前提が変化してきているような気がします。

1では、そんな風な感覚で世の中を捉えている今、改めて今年の演劇祭の総括と来年度の展望をしたらどうなりますか？

山口●三つあるのですが、さつき話していた格の違いをどうポジティブに演出するのか。違う言い方をすれば、良い意味での階層化だと思っんです。

くべき六年目になるのだと思っんです。伊藤●プロデュースは面白そうですね。プロデュースするのであれば、五年の枠組みは取っ払ったほうが選択肢が広がると思います。あと、僕個人の感想で言えば、space × dramaは、参加する側がアイデアを出せるとても珍しい形の演劇祭です。成長過程の一つとして大きいものなので、そのいい面は残していただいで、より一層、面白いイベントになつていけばいいなと思っっています。

山口●一番の課題は、劇場寺院と言ってきた應典院が、今後も劇場という機能に重きを置くとしたら、外部からどのような資源を調達するのがいいのかを考えねばならないことです。應典院は人的資源、物的資源、金銭的資源などが充実しているとはなか

自分たちのカンパニーとしての位置を考へてもらえるような仕掛けをつくるのが應典院の役目だと思っっています。結果として、序列の中に自分たちを位置づけて欲しいということなんです。それが二つ目。二つ目は、同業者として、同じ業界にいるんだという実感をどうかき立てるかという二つ目。一つ目で話した階層が違つた上で、どう連続していけるのか。例えば、中堅の劇団と旗揚げ間もない劇団が、どう連携していけるかを考へていきたい。三つ目は、どれだけ遊んでもらえるのか。作品を大切にしながら、應典院の場と空間という世界の中で、どのような遊び方があるのかという感覚を考へていただきたいですね。こちらの想定外を創出していただいで、それに応えられるもの

なか言い難い状況です。しかし、この十年の歴史で、應典院から演劇界に巣立つていった劇団がいくつもあります。ですので、そうした劇団の方々が應典院に対して何らかの愛着を持つていただいでいるなら、ぜひ「こんな後輩たちを育てたい」という想いと、具体的なアイデアを寄せていただきたいと思っっています。プロデューサーになつてもらうのではなく、こんな団体がプロデュースされたらいい、という「プロデューサー」の対象を明確にしてみらう、ということ。そうして、劇場の利用者の像が明確になれば、おのずとどんな作品が上演されたらいいのか、さらにはどんな劇場になつていったらいいのかが明らかになつてくるでしょう。そういう意味で、どんな劇団が應典院で公

にしていきたいと考へています。そういう意味で、来年は、中堅どころもお呼びして、週末の公演も視野にいれながら、可能性を広げた形での運営を考へています。

1それでは、最後に、それぞれに一言ついでいただいで、まとめにしたいと思います。

西島●まずまず、應典院としてのプロデュース能力を考へていかないかと思っいます。経済的な問題もあるかと思っ思うのですが、色々な劇場がある中で、特異な空間の一つであるし、演劇以外の活動をやっているのが特色で、それが今まで価値があつたのだと思っうのです。が、それだけでは、今後は厳しい。劇場としての特色をきちんと打ち出していくべきだと思っうんです。劇場としての責任を果たしていい

演をしたらいいのか、ということ。先輩劇団たちの知識と経験と技術をもつて示してみらう、そういう世代間の想いが接続する場として、space × dramaが機能するといっいですね。

1なるほど。来年は相当のバージョンアップがなされそうですね。本日は、ありがとうございました。



space × drama 2007 オープニングイベント
@應典院 気づきの広場



サリ ngRock
突劇金魚主宰・作・演出
2002年、旗揚げ。滑稽ゆえに悲しい一生懸命なキャラクターを生み出し、ガールズポップな作品を世に送り出す。

はないでしょうか。
— 劇団として、演劇祭に向け、来年への展望はいかがでしょうか。
サリ ng ● 実は、来年三月にも公演があり、まだちゃんとは考えられてはいないのですが、正直、プレッシャーはあります。前回優秀劇団の France pan さんは、しっかりしていて、制作者会議でもリードしてくれていました。自分たちはそれができるとは思いません。前回は、作品的にも、優秀劇団としての公演なので、観る側の意識もおのずと違

う部分があると思うので、普段の公演以上に、ちゃんとしなさいといけません。お客さんに近い部分も持ちつつ、テーマをもっと社会的にも、哲学的にも、掘り下げる作業が必要になってくるのだと思います。お客さんが笑っているうちに、心の深くで痛いところまで近づきたいですね。演劇祭としては、France pan さんとは、違う感じで、どちらかというと、一般の方に近い感覚で貢献できたらと思うんです。でも、今年の space × drama の空気、劇団同士の交流だとか、お互いを観劇、批評しあう姿勢などはきちんと伝えていきたいと思っています。その上で、今年は真面目な感じだったので、来年は、もうちょっと、肩の力を抜いたといえますか、色でたとえれば、ピンクっぽ

い演劇祭にしたいですね。
— まとめとして、應典院で挑戦したいことなどをお願いします。
サリ ng ● やはり、應典院は天井が高いんですよ。なので、今年は、舞台上に高さを出したんですが、客席が低いので、お客さんが見上げたときに、天井も視野に入ってしまうんです。そのあたりを何とかしたいと考えています。今年とは違うクリアの仕方を目指したいですね。客席が常設ではないので、色々な可能性があると感じています。なんといいっても、1週間お借りできるので、動員を増やすことと、協働プロデュース公演なので、ちょっと、無茶なことにもチャレンジしてみたいですね。
— 今後の活躍、期待しています。本日はありがとうございました。

優秀劇団インタビュー

應典院舞台芸術祭 space × drama2007



毎年、space × drama の参加劇団から1劇団選ばれる「優秀劇団」。選出された優秀劇団は、翌年の space × drama にて「協働プロデュース公演」と謳って上演をいただきます。2007年度の優秀劇団は、最も積極的な努力と挑戦の痕跡が見られた点を評価し、「突劇金魚」に決定しました。そこで、「突劇金魚」主宰、作・演出であるサリ ngRock さんに今年の感想と、来年の space × drama に対する展望を伺いました。

(聞き手：城田邦生/應典院主務・劇場担当)

— 優秀劇団選出おめでとうございます。
サリ ng ● ありがとうございます。
— 今回、ご参加いただいて、印象に残ったことは何でしたか。
サリ ng ● やはり、毎月会議があったりして、他の劇団との親密な交流があったことですかね。良い意味で変わっているというか、他の演劇祭にはないものでした。
— そんななか、どうして突劇金魚が優秀劇団に選ばれたのだと思いますか？
サリ ng ● 今回選考対象となった四団体のなかでは、一番お客さんに近いところで勝負したからかなと思います。ひらたくいえば、エンターテイメント。エンタメだから良いわけではないですが、開かれた感じが受け入れてもらえたのかな。自分たちの中でも、今まで in (内的) な世界でつくっていたのが、だんだん、お客さんに楽しん

でもらえる要素を組み入れられるようになってきたんですね。out (外的) を意識できるようになったといえますか：今まで in で閉塞していたものをきちんと、out にむけて発信できるようになり、お客さんにも共通認識として、楽しんでもらえるようになった上で、自分たちの持っているテーマ的な部分も描けたことが一番大きいので



2007年、突劇金魚「愛情マニア」より@應典院

SxD 2007 スペースドラマ

クロージングトーク 紙上再現

ゲスト
伊藤拓さん (France Pan)
十時直子さん (10×10×10)
萩原宏紀さん (劇想空飛ぶ猫)
小嶋一郎さん (旧劇団スカイフィッシュ)
Saring Rockさん (突劇金魚)
岩崎高広さん (LAST HOPE)
聞き手
山口洋典 (應典院寺町倶楽部)

2007.8.25 21:10 ~



山口：それでは、これより space × drama2007 クロージングトークを開催いたします。では公演順に、自己紹介と公演内容を紹介をお願いします。岩崎・七月の一番始めに、「お吉物語」という歴史物をやりましたラストホープの岩崎と申します。普段は、東京で活動しているのですが、今回は大阪までやってきました。実は、僕自身、演出がはじめてだったんですね。そういう部分で色々あったんですが、大阪で公演ができたことは、たいへん良い経験になりましたし、

劇評ブログでのご批評も励みになりました。ありがとうございます。サリング・突劇金魚のSaring Rockです。公演からひと月しかたつてないんですが、ものすごい過去のように、DMOが男子大学生を拉致するというお話をやりましたが、普段から、女の子の心情をメインに、女の子目線のガールズロックを目指した作品をつくっています。小嶋・スカイフィッシュの小嶋です。「彼岸」というタイトルで、ヨン・フォッセの台本を原作として作品をつくりました。また、

「鶴」というフリーペーパーも発行しているので、よろしければ、一度御覧ください。萩原：今月の頭に公演をさせてもらいました。「劇想空飛ぶ猫」の萩原です。ダメニートが監案をするといううちよつと、突劇金魚さんとかぶっているような、いないような作品でした。十時：「10×10×10」の十時です。公演は先週に終わったばかりなのですが、舞台上に細い路地をつくりまして、そこで立ちあがる物語を会話劇にしました。お客さんの多様な反応に出会えたのが、面白かったです。伊藤：France Panの伊藤です。昨年の

space × drama2006の優秀劇団に選出させていただきました。今年も参加しております。作品は…今、観ていただいたとおりです。山口：ありがとうございます。この演劇祭は、このスペースに多様なドラマをと、設立五年以内の若手劇団の皆さんが集まっていたとき、相互に表現を展開してもらった中で、その中から一団、優秀劇団を選び、次の年に應典院寺町倶楽部との協働プロジェクトとして公演をしていただくというspace × dramaと名付けられた演劇祭です。本日は、ご参加いただいた六つの劇団の公演、および、演劇祭の総括の場したいと思います。というわけで、さっそくですが、各劇団に二つ質問させていただきます。まずは、この應典院という場を使うにあたり、どういった仕掛けをしたのか。もう一つは、この界限、上町台地周辺でやることに意識したことはなんでしょうか。

サリング：そうですね。應典院は、高さがあるので、それを何とかしようと考える二段舞台にして、高い所から飛び降りたりといったことを考えました。十時：円形のホールですので、普通にやるのはおもしろくない。そこで、隙間というアイデアが思い浮かびました。プラス、空堀をモデルにしたお芝居をつくったんです。それは、上町台地での公演ということ意識しましたね。お芝居を見終わった後に、まちに向向してもらって遊んでもらえたらなど。地域と劇場を結ぶことができたらと考えて仕掛けてみました。山口：なるほど。一方で、地域という観点で考えると、ラストホープの岩崎さんは拠点は東京、物語の舞台は下田、公演は大阪しかも今後、全国を巡回してあらゆる地域を渡り歩いていくという感があります。この演劇祭に参加して、あるいはこの大阪と

いうまちにどんな魅力を感じましたか。岩崎：大阪だけというわけではないんですが、他の地域でやるメリットというのは、出会いだと思います。少なくとも、今回一緒に参加した五劇団さんとは、知り合いになれましたし、大阪のお客さんに触れ合うこともできました。それが、一番の収穫です。小嶋：僕も、いろいろな地域で活動したい気持ちは一緒ですね。今は、大阪での活動がメインですが、應典院でやることについては、お寺なので、ガラス張りのロビーの向こうにお墓がある。そのへんで、お客さんが勝手に意味付けをしてくれるんじゃないかと考えていました。萩原：僕は、應典院が好きなんですよ。というよりは、應典院のスタッフさんが好きなんです。僕らみたいな若い劇団相手だと劇場によっては、すぐくなられた態度をとられることがあるんです。

應典院では、そういうことがなく、すごく丁寧な対応をしてもらえるので。

山口：そう言ってもらえて光栄です。ここで客席の方にもマイクを向けてみましょう。

— 女性が代表の劇団からお二人が出ていらつしゃいますが、そうして男の人に臆さないで発言できる秘訣はありますか？

サリング：基本、お芝居をつくるにあたっては男も女も関係ないですよ。ていうか、むしろ、女性でしか表現できない部分は多いと思うんです。わたしが今、ここにいるのは劇団の代表だからなんですけど、基本おもしろいものをつくっているという自信があるから、ここにいれるというのがあります。

十時：今、めっちゃめっちゃ緊張してますよ、私あまり、私も男と女って意識したことがないんですが。感覚でお芝居つくってますよね。女性のほうがナイーブな面をうまく表現できると思いますし、そうとらえると、サリング

さんも言っていました、女性にしかできない表現をつくりだしているって思っています。

萩原：僕は、近畿大学の演劇芸能専攻の出身なんですけど、授業で、短編の戯曲を書くっていう授業があるんです。大体、男性より女性の方が面白いものを書いてくるんですよ。だから、僕は、女性こそ筆を持つべきと考えられています。卒業するのたいやめてしまっんです。勿体ないって思いますよ。自信を持って頑張ってもらいたいって思います。

— 作品づくり以外でこだわっている部分はありますか？

岩崎：今回は、大阪にくることを最優先しました。そのため、チラシなどにお金をかけることが無理でしたが、ですがそれは、そこにコストをかけるより、より数多く大阪にくるほうがメリットがあると考えたからなんです。サリング：チラシです。イラストを自分で描いているのですが、そのほうが世界観をよ

り伝えることができると考えています。あとグッズなどの余分の遊びを取り入れて、お客さんに楽しんでもらおうと思っています。

小嶋：フリーペーパーの発行ですね。小難しい文章を載せているんですが、そのほうが劇団のカラーをよりお伝えできると考えています。何か、小難しいことをやっている連中がいるぞっていう感じで。

十時：小劇場演劇が身内だけのものになっている現状があるんです。一部の演劇ファンしか観に来ないっていうか。そのへん何とかしたいと思い、今回も空堀を舞台にして、空堀に関心のある方々にアピールしたつもりです。あとは、会場の雰囲気くくりにも気をつかったりしています。

伊藤：演劇的な知の共有に興味がありますね。演劇人同士が交流し、おもしろくなっていく場を創出していくことで、演劇を観るお客さんを増やしていく必要性を感じています。

山口：それでは、最後に、私にとつてのspace X drama2007はごうだ、来年はこうなつて欲しいという言葉をそれぞれからいただいて締めたいと思います。伊藤：space X dramaは、自分たちで発信していける演劇祭。これだけ、劇評ブログやブログが盛り上がりしている演劇祭は全国的にも珍しい。これを引き継ぐ形で、来年も盛り上がりいくことを願っています。

萩原：去年から参加していますが、去年はホームページだけだったんです。今年は、ブログや

劇評ブログがあり、自分が書かなきゃいけないので、否が応にも観に行かなきゃいけない状況でした。けどそれが良い方向に進んだと考えています。このまま、進化していく形で十年二十年続いて世界一の演劇祭になつて欲しいです。

小嶋：平日の公演というのが、特徴ですね。週末だけじゃなくて平日にお芝居が観れる環境は良いと思うんです。来年も、平日やつて欲しいですね。

サリング：出会いの場でした。絶対、知り合えないような劇団さんとも知り合えましたし、観てもらったことのないお客さんにも劇評プログラーとして観てもらえた演劇祭でした。これをもとに、プラスしていく来年にして欲しいと思います。

岩崎：僕にとつては、演出としてとても良い経験の場になりました。演劇の方々

とつながりができたのが良かった。僕は

ふだん、俳優業をやっているんですが、映画に出ますと、海外の映画祭に行ったりします。そこには、こういったレセプションの場があり、みなさん、活発に交流するんです。だから、演劇も、應典院のようにオープンングイベントやこのような機会をたくさん設けてもらつて、活発に交流してつてもらいたいですね。

十時：過去のspace X dramaに参加している劇団を見ると、もはや名の知れた劇団さんが多いですね。ですので、これを機会に自分たちも頑張りたいなと思つています。今回とても、お互いに刺激を与え合うことができました。来年も同じような有志が集まつて盛り上げていっていただきたいと思つています。

山口：こちらこそ。今後とも共に盛り上げていきましょう。

(構成：城田邦生／應典院主務)



それぞれが思いを語り合う。

客席との応答を通じて、真夏の演劇祭を振り返った。

寺子屋トーク、50回。

1997->2007

10年の軌跡



2007.9.24 第50回寺子屋トーク「市民の時代のスピリチュアリティ」
終了後の「ワンコイン交流会」の一コマ

【出会いと気づきと学びと交流の場を求めて…】

1997年より、現代版の寺子屋の復興を願い、不定期で開催してきた連続学習会「寺子屋トーク」。應典院再建10周年を迎える今年、記念すべき50回目のプログラムを9月24（月・祝）日に催しました。

当初は、應典院に隣接する「パドマ幼稚園」の保護者のみなさま等に参加いただこうと、平日の午後で開催していました。その後、関西こども文化協会をはじめ、いくつかの団体との共催形式で実施するようになり、企画内容も充実させていくことができました。やがて「コモンズフェスタ」など、その他の名物事業との相乗効果も重なって、2001年頃に現在のような「土日祝日の午後」の開催という形態に落ち着いてきました。実に細かい字となり恐縮ですが、左記が全記録です。

開始直後に1分間かけて行われる「ご本尊ライトアップ」による〇〇、終了後の「ワンコイン交流会」、そして最後の「小指と小指から」始まる五本締め、など、多くの方に馴染みのある催しとなっていると思います。今後も鋭意、企画実施に努めて参ります。ご期待ください。

旧来型の地域や家族の規範に拠って命脈を保ってきた、伝統宗教の枠組みの中に位置しながら、個人化する社会の変化を敏感に自覚的に受け止め、個人化する社会にどうコミットすべきか、現代に生きる宗教施設や活動のあり方を模索してきた（している）のが、應典院という寺院だと説明しても、おそらく間違ではないだろうと思う。人生の完成期をサポートしようとする試みや、表現活動を通じた個人々の尊厳の回復などは、象徴的な取り組みといえるだろう。その意味で、應典院再建10周年を迎えた今年、寺子屋トーク50回の節目に、「社会の個人化と個人の宗教化」を「スピリチュアリティⅡ新霊性文化」の概念によって論じる、島菌進氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）を講師に迎えられたということは、実に自然な流れとして受け止められた。

島菌氏が述べられているように、社会のグローバル化や個人化を引き金に、日本をはじめいわゆる先進国と呼ばれる国々で、個々の人生やアイデンティティのあり方と、社会規範や公共性のあり方、宗教あるいは宗教的なものとの関係性は希薄化している。それらは、いったん個々のスピリチュアリティのあり方に還元されながらも、再度社会における集合的な心理や行動の多様な姿を

寺子屋トーク第50回イベントレポート

とって現れ解釈されつつある。第50回寺子屋トークの背後には、そうした社会の大潮流をふまえ、應典院の諸活動が持つ現代的な意味を、伝統宗教を含む歴史的な視野の中で相対化して位置付け、今後への指針としていきいという願いもあったのかもしれない。

広い視野、長い歴史の中で、目前の事象を捉えるという意味で、島菌氏の講演を通じた問いかけは実に有効なものであったと思う。一方で、その問いの真意とは逆に、「スピリチュアリティ」のミステリアスなイメージのみに、世間が目を奪われやすい点に、多少の危惧もぬぐえない。人間が精神的な存在であることは、誰にも否定はできない。むしろ、精神的な存在であるが故に、個人の問題をいかに社会の問題として公共化していくことができるのか、という命題との関係性に目をむけるべきだろう。「議論はこれからということなのでこの場を終えねばならないのが残念。スピリチュアリティという言葉で、決して簡単にわかった気になってしまいうようなものではないことがよくわかった」という、秋田光彦氏（應典院住職）の閉会の一言に今後への抱負が込められているように感じた。

（弘本由香里・大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員）

回数	年月日	タイトル及び講師 (肩書きは当時)
第1回	1997.5.22	「EQのかしこい育て方、教えます」金香百合 (大阪YMCA幹事)
第2回	1997.6.23	「新家族物語・地域から母子を考える」山崎高哉 (京都大学教授)
第3回	1997.7.14	「癒しの時代をひらく」上田紀行 (東京工業大学大学院助教授)
第4回	1997.9.10	「自分自身を大切にする」梅原昌子
第5回	1997.10.22	「芸術文化NPO/地域社会再生を考える」メインゲスト: 衛紀生 (演劇評論家)
第6回	1997.11.8	「介護のころを考えると」西脇創一 (在宅介護ネットワーク、北欧の福祉を学ぶ会代表)
第7回	1997.12.9	「子どものころは死んでいるか〜生死を悟るころを育む〜」カール・ベッカー (京都大学助教授)
第8回	1998.3.5	「居場所のない子どもたち〜すべての家庭を(賢治の学校)に〜」鳥山敏子 (賢治の学校)
第9回	1998.6.8	「不登校児から学ぶもの〜心の教育を考える」村山貴 (生野学園校長・臨床心理士)
第10回	1998.7.2	「子供の心と脳を育てる」久保田鏡 (総合幼児教育研究会常任講師)
第11回	1998.9.30	「人が人としてつながりある社会のシステムづくり」野田正彰 (京都造形芸術大学教授、精神科医)
第12回	1998.10.26	「子どもの力を引き出すプログラムについて」田上時子 (関西大学非常勤講師、ドーンセンター事業担当コーディネーター兼務)
第13回	1998.11.9	「教育って何だ!」メインゲスト: 汐見稔幸 (東京大学助教授)
第14回	1998.12.7	「自信」を育てる子育てワーク」手塚郁恵 (ホリスティック教育研究会代表、日本ホリスティック協会副会長)
第15回	1999.2.11	「日本語のレッスン」竹内敏晴 (演出家)
第16回	1999.5.28-29	「写真家・橋口穰二の仕事〜時代と個人を見つめつづけて〜」橋口穰二 (写真家)
第17回	1999.6.11	「大いなるものに生かされる〜幼児期からの心の教育」伊藤隆二 (東洋大学教授)
第18回	1999.7.1	「ノストラダムスをぶっ飛ばせ!」メインゲスト: 高橋卓志 (臨済宗・神宮寺)
第19回	1999.9.15	「教育・競争から共生へ」横川和夫 (教育ジャーナリスト)・山本健慈 (和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授)
第20回	1999.11.13	「日本人の死に方大論争!」メインゲスト: 大村英昭 (大阪大学教授・宗教学・本願寺派僧侶)
第21回	2000.2.9	「どんぶらこっこ〜いのちをたくむ児童文学〜」安達忠夫 (埼玉大学)
第22回	2000.6.10	「学びをつなぐ力」金香百合 (大阪YMCA)、吉田敦彦 (大阪女子大)
第23回	2000.7.20	「虐待〜暴力が子どもの心に与える影響〜」横湯園子 (中央大学教授、日本子どもの虐待防止研究会)
第24回	2000.10.23	「もうひとつの"学びの場"を創る〜寺院とNPOの協働を考える」メインゲスト: 奥地圭子 (東京シュレ代表)
第25回	2000.11.12	「日本人の死に方大論争!」パート2」メインゲスト: 碑文谷創 (葬送ジャーナリスト)
第26回	2000.12.24	「21世紀法要」辺見庸 (作家)
第27回	2001.2.6	「新世紀・アーツ解体新書」メインゲスト: 小暮宣雄 (NPO法人アーツワークス理事)
第28回	2001.6.16	「生き方のお手本?〜自分をほく哲学クリニック〜」メインゲスト: 鷲田清一 (大阪大学教授・臨床哲学)
第29回	2001.10.8	「ベストセラー『がんばらない』の鎌田さんと語りあう」鎌田貴 (諏訪中央病院管理者)
第30回	2001.11.11	「お骨の行方〜人生の店じまいを考える〜」メインゲスト: 井上治代 (ノンフィクション作家)
第31回	2002.4.7	「仏に会う」立松和夫 (作家)
第32回	2002.7.13	「息を鍛え、芯を育む〜子どもの身体感覚を考える」メインゲスト: 齋藤孝 (明治大学助教授)
第33回	2002.7.23	「不可思議と出会う〜僧侶として、小説家として〜」メインゲスト: 玄侑宗久 (僧侶・作家)
第34回	2002.9.28	「東京vs大阪 都心暮らしの愉悅〜あなたのまちのタウンマネジメント入門〜」メインゲスト: 森まゆみ (作家)
第35回	2002.11.30	「"からだ"と"こころ"のチューニング〜建設的な生き方>のススム」メインゲスト: テビッド・K・レイプルス (文化人類学者)
第36回	2003.4.29	「女と男のより良い未来〜ひとり自立、ふたりの自立」三輪敦子 (元国連女性開発基金職員)
第37回	2003.5.26	「大阪リハビリと人材育成〜価値創造の都市再生を考える」メインゲスト: 汐見稔幸 (東京大学大学院教授)
第38回	2003.11.7	「まちとアートの子育て〜芸術は社会に何が出来るか」メインゲスト: 今中博之 (社会福祉法人素王会理事長)
第39回	2004.2.14	「シングル化する日本」伊田広行 (大阪経済大学助教授)
第40回	2004.2.21	「"個力"をたくむプロになろう!〜組織から仕事人へ〜」メインゲスト: 太田肇 (滋賀大学教授)
第41回	2004.7.10	「がんばれ仏教!」上田紀行 (東京工業大学大学院助教授)
第42回	2004.11.23	「極楽タウン・わたしたちの寺町について語ろう」メインゲスト: 加藤政洋 (流通科学大学助教授)
第43回	2005.5.14	「生老病死のコミュニティケア〜いのちを支えるピラー八を考える」メインゲスト: 高橋卓志 (臨済宗・神宮寺)
第44回	2006.6.24	「映画と大学教育〜キャンパスから創造が生まれるか」メインゲスト: 石井聰互 (神戸芸術工科大学教授着任予定)
第45回	2006.10.1	「看取り文化の新しいデザイン」メインゲスト: 小林光代 (作家・元看護士)
第46回	2006.10.29	「死者とのコミュニケーションは可能か?」メインゲスト: 内田樹 (神戸大学院大学教授)
第47回	2006.12.8	「いのちのエナジー〜地球と暮らす新しいライフデザイン」メインゲスト: 今里滋 (同志社大学教授)
第48回	2007.2.18	「微笑みで開く(地域の看取り)」メインゲスト: 柴田久美子 (特定非営利活動法人なごみの里代表)
第49回	2007.7.16	「風狂をどう生きるか〜日本人へ贈る「狂い」のメッセージ」町田宗鳳 (広島大学大学院教授)
第50回	2007.9.24	「市民の時代のスピリチュアリティ〜現代日本人の生きる意味を考える」メインゲスト: 島園進 (東京大学教授)

【誰もが風狂に生きられる】

「町田宗鳳」。この名前にはかすかに記憶があった。本棚に目をやると、町田宗鳳著の本が4冊あった。「世紀末の革命者 法然」には赤い線がたくさん引いてあった。私はすでに町田さんと出会っていたのだ。宗教者の中では法然が一番好きな私にとって、町田宗鳳さんは法然に焦点をあてて下さった、特別の名前だったのだ。

應典院の「風狂に生きる」の企画を知り、何があっても行きたいと思った。テーマも魅力的だが、何よりも町田さんに会いたかったからだ。一休を筆頭に、何人かの「風狂に生きる」人の例が紹介されたが、とても共感できる人々だった。「風狂に生きる」が身近なものとなった。

また、一休禅師の勤める「善を生きたる」が全身全霊の行為であるなら、40年以上一心不乱に吃音に取り組んできた人間として、また、これまでの価値観に激しく抵抗してきた人間として、私もまた「風狂の人」のひとりだったのだ。これまでの私の人生を認めていただいたような気がした。また、「風狂に生きる」と言われれば、語感から誰にもできることではないように考え

2007.7.19



第49回寺子屋トーク



風狂をどう生きるか

日本人へ贈る「狂い」のメッセージ



<メインゲスト>
町田宗鳳
広島大学大学院教授
<ゲスト>
nanaco
フォトグラファー
&シンガー

られるが、町田さんは「ていねいに生きる」ことだとしめくられた。これなら決意さえすれば誰にでもできる道だと思え、ありがたかった。あとひとつありがたかったのは、感謝念仏と出会ったことだ。應典院の場で経験したあの神秘的な体験を多くの人にすすめてほしいと思った。8月の初め、言語障害児教育の教師の全国大会があり、私が座長をした「吃音分科会」で、130名ほどの参加者と体験した。また、吃音親子サマーキャンプの保護者の学習会でもやってみた。吃る人にとって息を深く吐くことを身につけることが何よりも大切で、感謝念仏はとても役に立つものだ。私にとって、ひとつの大きな財産となった。

【行を学ぶ・行に学ぶ】

人には、前に進むこともできず、後ろに後退することもできず、左右に転進することもできないときがある。近代合理主義を否定するものではないが、人生には理性や論理や説得では解決できないことのほうが、実は多いのかもしれない。市井の人であれ、著名人であれ、底なしの虚無の深遠を覗きみ、人生の風雪をくぐりぬけて

来た人には、共通した存在の深みや凄みを感じてきた。ある種の「狂気」とでも言えようか。ずっと、感じてきた。その正体は何か。「狂い」のメッセージという講演の副題に惹かれた。

町田宗鳳さんは、宗教の原点は苦悩であり、宗教や人間存在の共通基盤には「狂い」があると説明する。名僧、一休の話が興味深かった。僧衣のまま遊郭に通い、晩年は盲目の侍女とすさまじい愛欲生活を経験する。当時の禪の虚構性への強烈な異議申し立てだ。

既存の社会の常識と秩序の破壊。生老病死の人生の苦悩から一条の光を求め、非日常空間に解き放たれていく破壊と創造のエナジーとして、「狂い」が必要なのだろう。喪失感や絶望の深淵からこそ、本物の希望が生み出される。絶望と希望は背中合わせなのだ。人は希望があるから前に進むのではない。苦しくとも、前に進むこと自体が希望なのだと思つた。

講演中に、トイレ掃除に関する「下座行」の話があった。あれから仕事や家事の雑務があるど、意味もわからず「ゲザギョウ、ゲザギョウ」と心の内でつぶやく自分がある。(宋悟・コリアNGOセンター代表理事)

高校生の舞台に、 〈生きるための演劇〉 の原点を見る

5年目を迎えた
ハイスクール・プレイ・フェスティバル
(HPF)

秋田 光彦 (大蓮寺・應典院住職)



— つながるための身体

五年目のHPFにして、初めて公演前の挨拶をすることになった。毎朝の仕込み前に、本堂ホールで本尊の前に高校生たちに何を語るのか。いささか悩んだが、寺の住職として「願い」に生きることに尊さ、表現することのゆたかさについて話した。子どもたちの反応は不明だが、ここがお寺であることは、例年以上に感じ取ってくれたと思う。

應典院でHPFが始まったのは、二〇〇三年。それまで定席だった会場が急に閉鎖となり、さまざまな経緯があってその代替会場として提供を始めた。それ以来、毎年應典院の七月は演劇の「甲子園」状態になる。

「なぜお寺で演劇なのか」は、應典院が再建して以来、私が抱えてきた大きな自問でもあった。「演劇のための劇場」であれば、既存の商業劇場や小劇場に任せればよい。お寺が劇場を目指すというのは、それが演劇のため以外のもうひとつの可能性を潜在している

とずっと窺ってきたからだ。自己と他者はどう関わるのか、対話とか協働のためのちえ、また若者たちがこれからの地域に参加・創造する、いわば生きるための演劇というのが、私が当初からの願いでもあったが、それが、はつきり像として結ばれたのも、このHPFとの出会いがあったからだ。

竹内敏晴は、身体表現の原点についてこう述べている。「まっすぐに声を発するということ、相手に働きかけること、ふれること、現在はこの力が忘れられている。というより、そのように声を発することを、怖がり避けるように『からだ』が追い込まれている」「生きることのレッスン」

「抑圧された身体をことば(声)が開く」という竹内の言葉に、私は劇場という場所の本質を見た。「身体を「関係」と置き換えてもいい。人と人がつながる重要性は説かれても、つながるための根拠がどこにあるのか、その課題は高度な消費で飾られた都市からは置き去りにされたままだ。

高校生たちの舞台は、身体とことばの関係を、これ

以上ないほど象徴的に立ち上がらせる。ここでは演劇は技術ではない。身体の気づきを促し、ゆたかな「自己」を目覚めさせる、レッスンの場だ。舞台上から放たれることばは、台詞というより、世界への呼びかけであり、「私はここにいる」という子どもたちの主体性の発現である。観客席というコスモスに向けて、自らの存在を賭けて放つ、意志表明なのである。

高校生の演劇は、〈生きるための演劇〉というテーマを、應典院の下絵にくっきりと浮かび上がらせてくれた、と思う。

— 伝え・伝えられる場所

もうひとつ語っておきたいことがある。バックヤードを支えている若いボランティア・スタッフたちの存在だ。二十代半ばの、小演劇で活動する若者たちが期間中(メイン・スタッフはほぼ終日)、高校生の舞台づくりのサポートに当たる。大人が介在しない、真っ白な空間で、十代半ばの子どもたちと、それとちよう

高校生と共に歩んだ4年間

HPF ボランティアスタッフ/音響担当
須川 忠俊



一言で「4年」と言うと、どう感じるだろう。私が高校演劇祭(以下、HPF)に関わって、すでに4年が経っている。はじめて担当した高校生が、既に大学に入学しているのだ。この4年間で、さまざまな変化が見られた。初年度は、暗中模索。2年目は、試行錯誤。3年目から、ようやく周りが見えてきた。もちろん、われわれスタッフだけではなく、高校生達にも少なからず変化が見られるのだ。「お芝居が楽しい」という気持ちが、われわれにもひしひしと伝わってくる。小劇場と高校演劇の垣根は、正直まだまだ存在すると考える。高校演劇という存在を知らない演劇人すらいるのではないだろうか。しかし、その垣根が徐々に低くなってきているという実感も同時にあることは確かだ。今年から、公演期間中のサポートスタッフに現役の高校生の姿があった。今までは見られなかった光景だ。確実に、着実に。不景気と言われる関西小劇場界に、新しい風が吹いていることを感じられた。

小劇場において、高校生が芝居を打つということは、決して当たり前のことではない。高校の演劇部の公演となれば、学校の講堂か体育館、もしくは教室を使って、ということもある。

大会でどこかのホールを使うこともあるだろうが、決して小劇場で公演をすることはないのである。そこがHPFの利点であり、希有なところでもあるのだ。自分の高校時代を思いかえしてみれば、誰に習うこともできず、自分たちの考えだけでお芝居を作っていた。それも、決して悪いことではない。しかし、助言者がその時いてくれたら、どれだけ勉強になっただろうか。HPFの期間中にブログを書かせていただいているのだが、その中で繰り返し書いている内容がある。

「大阪の高校生は恵まれている」

その場所はすでに用意されている。後は、自分たちの気持ち次第でどうとでもなるのだ。決して現状に胡座をかくことなく、これからもさらに熱い舞台を作り上げてほしいと思う。

ど十歳ほど違う「異世代」の若者たちが織り成す「場」の魅力に私は惹かれる。それは、演劇という「技」を共通軸にした、伝え伝えられる創造的なコミュニティだからだ。

もちろん、音響や照明といった技術指導もある。が、それだけが「技」なのでなく、演劇で必要なすべての「技」は、対話や協働、創造……と、彼らがこれから生きるために必要な「ちえ」と等しい。教科書も教師もいない劇場の暗がりのなかで、彼らは自らの「技」を探しながら、(不器用ではあるが)互いの思いに伝熱していくのである。

何もそういった「技」は年長者(若者)から年少者(高校生)に一方的に伝えられるものとは限らない。HPF終了後に、多くのスタッフが異口同音に「高校生たちに学んだ」というが、それは、たぶん少し遡った自分の地点を確認しながら、目の前の現在をどう生きるのかという若者なりのライフ・レビューと重なっている。伝え、伝えられる関係の行方に、へきるための演劇の発見がある。



演劇は祝福の芸術である。終幕のアプローチは、演者やスタッフへの賞賛であると同時に、へきるための演劇に對する、人々の共感と参加の拍手にちがいない。いや、拍手は観客席だけが独占してはならない。「お寺で演劇」とは、これから出会うであろう、まだ見ぬ演者や観客とのアンサンブルをともに探し出していくことなのだ、と思う。

アート・ミーツ・應典院 應典院が持ったもうひとつの面貌

風景をジャックされた

應典院とアートが出会う契機は、2000年、第3回目の「コモンズフェスタ」に遡る。アーティストの樋口よう子さんから、現代美術の作家の集合展を應典院でできないかと提案があった。当時の秋田は現代アートについてほとんど知識も関心もないに等しかったが、それまでのコモンズのダンスや写真展と同じようなプログラムとして了解した。この年11月、「LIFE」とテーマを打ってコモンズが開催、應典院全館がアーティストたちに解放された。

そこで開催された数々の展示に秋田は心を奪われる。期間中、はいわばフリーランスの個人だ。そのためか作品には個人の生き方、生活感がにじみ出てくる。作品が評価の対象なのではなく、それがインセンティブとなって一人ひとりの感性が浮き彫りになってくる。現代アートの企みに、新しい世界観や社会観の創造性を垣間見たのである。

当時、秋田は、急速にアートマネジメントの領域に踏み込んでいく。現代アートに喚起されたのか、應典院という場のひとつの可能性を探し出そうとしていたのだろう。その関心はやがて企業のメセナ活動に向き、2001年、企業メセナ協議会プログラムオフィサーの熊倉純子さん（現東京芸大准教授）の勧めもあって、トヨタ自動車、アサヒビールなどのアート・メセナの門を叩く。多くはアーティストのプレゼンを受けていたメセナ担当者には宗教家の提案は奇異に写ったかもしれないが、以来コモンズフェスタには2001年から3年連続で、想像以上の協賛を受けることになる。

コモンズフェスタと現代アート

2000年の衝撃を引きずりつつ、コモンズフェスタは2001年も樋口さんプロデュースによって、しばたゆりさんの「My Object, I and object」をメインに開催された。これは

應典院は作家ごとにブースが区切られ、14組の作家による作品が展示、多くが参加型で、鑑賞者が文字通りアートに「ふれる」場面があちこちで展開された。額縁におとなしく納まった作品ではなく、作品がひとつのインターフェースとなって、作家と観客の関係をつないでいく。それはもはや「美術鑑賞」という枠組みを超えた、新しく刺激的な体験となった。應典院の道路に面した西側壁面には巨大なバーコードの作品が張り出された。さらに、山門の水鉢に人体を模した模型が沈められ、2階のロビーのガラス面にはビデオアートが投影される…。應典院はアートによって、「風景をジャックされた」のである。

劇団員が連帯性の強い集団であるのに対し、アーティストは應典院初のアートプロジェクトで、しばたが事前段階でワークショップを何度も重ね、その成果を全館で展示する内容のものだった。ワークに参加した何十人も市民をはじめ、應典院スタッフ、また当時は大学生インターンが4名も常駐する体制となっており、しばたさんを中心に、不思議なアートコミュニティができあがっていた。秋田にとって、とくにアートの勉強をしているわけでもない学生たちが、プロジェクトに「はまっていた」様子も興味深く写った。アートが確かに人や地域をつなぐ、また新しいタイプの学びの場であることを確信するに至った。

2002年にはプロデューサーに大阪アーツアポリアの中西美穂さんが迎えられ、井上廣子さんと田尻麻里子さんの作品が展示された。ちょうど米国のアートインヘルスケア学会から研究者たちが来日中であり、招聘元に財団法人たんぼの家の要請を受け、應典院で交流セッションを行った。同時に大阪国際交流センターでも、日米シンポジウムが開催され、芸術とヘルスケア協会の一員として秋田が應典院のアートマネジメントについて発表する機会も得た。

應典院とアートを語るとき、2003年は、質、量ともにピークを迎えた一年といえるかもしれない。それまでは、外部のキュレーターに委ねていたものを、應典院スタッフの自主企画としてプロデュースを担当した。美術家の北山義夫さんや舞踏家石下徹さんら

ビッグネームの方々と「仕事」ができたことは、應典院にとって大きな成長の転機でもあった。北山さんは、磔刑図を描いた作古忠本堂内に展示、岩下さんは大蓮寺の墓地で無言のダンスを舞った。生と死をテーマとしながら、きわめて挑発的な、しかし不申議に融和する空間が現出したのも、應典院ならではの出来事であった。

この頃から、演劇専門だった應典院からはつきりアート(演劇も美術も)の應典院としてシフトをはじめる。同時にアートマネジメントの発想も強化され、関連するさまざまなセミナーやワークショップも頻繁に開催されるようになる。

2003年、應典院本寺の大蓮寺住職に晋山した秋田だが、思いがけぬ事態を招く。人間ドックで悪性腫瘍が発見されたのだ。應典院のみならず大蓮寺本体をも社会的な寺院とすべく、新たな供養ネットワークとしての生前個人墓「自然」と永代供養墓「其命」を相次いで建立するなど、精力的に動いたことが心労を重ねたのか、2004年は外科手術となって1ヶ月間の入院を余儀なくされる。幸い早期の発見であったが、決して無理はできないという緊張感が走り、翌年以降、コモンスフェスタは休会する運びとなった。

担い手としてのスタッフ

コモンスフェスタでアートが取り上げられることで應典院

應典院の10年の歴史において、「スタッフ史」は語りつくせないほどの意味を放つ。場をつくりあげてきた市民の背後には、必ずスタッフの存在があったからだ。その喜びと苦労は一言では言い表せない。また、一面でそれは人間として彼ら彼女らがどう寺と出会ったのか、また市民のコミュニティにどのように参加したのか、という人間としての成長の時間でもあった(全員で金沢芸術村や神宮寺にスタッフ研修にも出かけたこともあるし、住職とスタッフがぶつかることもしばしばあった)。

スタッフはここで何かを発見し、自立し、そして卒業していく。應典院がもっとも心血注いで育ててきたものは、ひょっとしてこのスタッフとの関係づくりであるのかもしれない。

点から面へ

くりかえし述べてきたように、アートの取り組みは、應典院にとって外部との協働のあり方を飛躍的に進化させた。そのエポックが2004年の、トヨタアートマネジメント講座の誘致である。トヨタ自動車の主催、企業メセナ協議会が運営を担当するこの講座は、アートマネジメントを地域社会に浸透させた代表的な市民講座だったが、その第●回を應典院が企画ごと受託、一線のアートマネージャーや大企業のメセナ担当者らと協

は活動の間口を一気に拡げていくが、それを成し遂げたのはスタッフワークの力であった。2000年より2007年3月の退職まで、應典院でのアート活動をキュレーションした大塚郁子、また2000年より2004年まで在籍し、後半は應典院ディレクターとして活躍した川井田祥子の仕事ぶりには特筆に値する。演劇部門で、演劇祭やHPF(高校生演劇祭)を担当した柳沢尚樹の活躍も忘れられない。いずれもアートの世界にふれることで、時代が要請するテーマを見事に選び取るようになっていった。アートが、スタッフの自立と貢献の姿勢を研ぎ澄ましていったといっている。

また、大蓮寺と應典院はエンディング関連事業にも取り組まれたが、ここでもアート展を経験した知恵が活きた。最新の葬具や世界の死装束などの展示を行った「エンディング見本市」は2日間に600人の来場、テレビ4局の取材を受けるほど注目を集めたが、一連の事業は田中いずみが担った。その発信力も大きな戦力となった。

再建時以来、秋田の右腕として、全体の運営を担ってきたのは池野亮光である。スタッフのマネジメントも、劇団との交渉窓口も、人と関係を結ぶ時には、必ず池野の頼もしい存在があった。池野は2002年、秋田の徒弟として、浄土宗教師となる。現在は、應典院事務局長の傍ら、寺院住職を目指し修行中である。

議を重ね、應典院のカラーを打ち出した2日間の講座をプロデュースした。スタッフ、ボランティアを含めれば優に1000人を超える面々が、全国から集まった。

この講座では、はじめて應典院が語る新たなアートの文脈が生まれた。「まち」をアートでどう結ぶかという関心である。トヨタアートマネジメント講座では、空堀界隈の長屋再生や新世界アーツパークの現場に足を運んだ。秋田は同時期に、都市基盤整備公団の上本町再開発プロジェクトにもかかわっていた。寺町だけではない、界限全体のつながりに視野が広がっていった時期といえよう。それは、2005年から参加する大阪アート・カレイドスコープ(大阪府立現代美術センター主催)でさらに発展していくが、その経緯は次回に譲る。

應典院という定点の存在が、2003年くらいから加速度を持って拡がり始めた。その広がりやの動力源となったのが、アートであることは間違いない。アーティスト、アートマネージャー、アートNPO、企業メセナ、さらに文化行政の担当者など、多様なセクターと市民を巻き込んで、現在のアートセンターとしての存在を固めていく。単体ではできないことが徐々に社会全体を動かしていく。應典院はこの時、点から面へと明らかかな広がりを見せていたのである。

(2007・10・2取材)



ゲストによるライブパフォーマンス！この様子は順次築港 ARC のウェブサイト [http://webarc.jp] にて配信。お楽しみください。



番組パーソナリティが関西のアート事情をプレゼン。「ARCAudio!!」を既に聴いてくださっているお客さんもチラホラ。



イベント開始！沢山の店内で買い物をしていただいたお客さんがイベントスペースに興味を惹かれ集まってきました！



メディアを使った情報発信 とリアルなスペースの連携

朝田 亘 (築港 ARC チーフディレクター)

「アートに関わる第一歩」をテーマに、ライブラリー運営や様々なサロン・ワークショップ企画を展開している築港 ARC。しかしその活動はそれだけに留まらず、同時にメディアを使った情報発信も活発に行っています。今号ではそんな築港 ARC のメディアプロジェクト「関西アート情報ポッドキャスト ARCAudio!!」、そしてその公開録音イベント (9月29日@アップルストア心齋橋) のレポートをお届けします。

●アートをより広く捉えるメディアとして

「ARCAudio!!」では、関西在住のミュージシャンや演出家による音声作品、アートの造詣の深い学者によるポイスコラム、関西週末イベント情報、また築港 ARC 月例トークサロンの公開収録の模様などが配信されている。

番組全体に流れているコンセプトとして「日常から見たアート」、「アート×社会」といった文脈がある。アートを単に美術や演劇、映画や音楽やダンスといった表現ジャンルに限定するのではなく、より社会の様々な分野とコミュニケーションでできる新たな価値観として広く捉えなおすこと

によって、関西のアートシーンの底上げを狙うとともに、「アート＝難解」という偏見を少しでも和らげることができれば、という思いで番組を制作している。

●公開録音イベント 築港 ARC の「矢」の向かう先

先月9月29日 (土) にアップルストア心齋橋にて「ARCAudio!!」の公開録音キャンペーンライブを行った。あいにくの雨天候となったが、お客さんも集まり、築港 ARC の試みを紹介する場となった。イベントの内容は関西のアートシーンの紹介とアーティストによるライブパフォーマンス。「ARCAudio!!」という番組を知ってもらうしながら、その延長線上には「関西には、実はこんなに沢山面白いアーティストスポットやアーティストが存在するんだ!」ということを伝えて、まずアートの興味を持ってもらうところから仕掛けていくものであった。

築港 ARC でもなく、また應徳院でもなく、アップルストアという場所で行ったことには理由があり、そのイベント目的に来る人だけでなく、たまたま店に居合わせた人にも興味を持っていただき、アートの関心層の間口を広げることが出来る場所として、アップルストアを選んだ。

正直、たまたま居合わせた層を惹きつけるのは難しい。アートに慣れている人に伝える文脈のみでは反応してくれない可能性が高いので、我々スタッフ自身が、どういう形で情報を編集し、新しいターゲットに向かって矢を放てるか。まさに築港 ARC のロゴのごとく、まだ矢を見ぬ多くの人に届けて行くための実践だった。

【ARCAudio!! とは?】 正式名称は「関西アート情報ポッドキャスト ARCAudio!!」。築港 ARC が制作する。地下鉄「大阪港」駅から徒歩4分のpiaNPOを拠点に活動する築港 ARC のスタッフが自ら情報発信できる媒体 (メディア) を持ちたいという思いから発意。限られた予算の中で、技術的・専門的な知識に長けていなくても、リアルな場を通じて得られた出会いや情報をより広く大多数の人に同時に知っていただくにはどうしたらいいか思索にふけた。

そこで、新聞やテレビなどマスコミなどとは異なった、もうひとつのメディアのあり方について造詣の深いチーフディレクターの知恵を活かし、毎週火曜日～金曜日まで曜日代わりで多彩な情報を配信中。なお、ポッドキャストとはインターネットラジオの一種で音声データファイルを公開する方法の一つ。情報のアーカイブ能力の高さ、技術面での効率の良さ、低予算のメリット、情報伝達範囲の広さなどに注目されている。

「ひら」と「場」の交差点……

應典院にしぎ

呼吸するお寺・應典院の、8月〜10月の活動記録です。関連のエンディング事業なども併せて報告します。

8月

- 1日・Space x drama2007 参加劇団旧劇団スカイフィッシュ千秋楽。午後10周年記念誌打合せ。デザイナー、印刷会社のみなさんも交えて。
- 2日・住職、事務局長、主幹が畿央大学往訪。日野原重明さんの講演拝聴。明朗快活な姿に圧倒。
- 3日・詩の学校お盆編「それから」。墓地での詩の創作と朗読会。「ピールでお盆」交流広場にて開催。
- 4日・劇団1/4世紀解散公演。
- 5日まで。夜には山口主幹・城田主務が芸術創造館で開催され
- たワークショップフェスティバル「38doors」に参加。
- 6日・関西広域連携協議会文化振興策最終検討会。報告書寫字確定。
- 7日・s x d 劇団劇理想空飛ぶ猫公演初日、8日まで。築港ARC 月次会議。
- 11日・劇団May公演初日、13日まで。
- 14日・主幹、城田主務が大阪市教育委員会に往訪。平田オリザさんのワークショップ開催協力。
- 18日・s x d 2007 特別招致劇団10 x 10 x 10 公演初日。19日まで。
- 19日・大蓮寺施餓鬼供養。

大阪大学コミュニケーションデザ

- イン・センター教授)を迎える。
- 27日・10周年記念誌のための「應典院の一日」撮影。朝のお勤めから夜のインド舞踊まで。
- 28日・自由派DNA公演。30日まで。夜には住職と主幹がアトリエインカープによる船場のギャラリーオープンパーティーに駆けつける。
- 29日・築港ARC出張企画「in アップルストア心斎橋。関西の実験的なアートスペースイベントの紹介だけでなく、番組に出演を控えているミュージシャンによる音楽ライブも開催。
- 30日・アーツなお仕事研究会。信田秋田光彦と詩人・上田假奈代による公開取材講座。築港ARC「ことばを使った自由表現ワークショップver4」開催。4月から始まった「ことば」シリーズのワークショップがついに最終回。

- 22日・朝からpianoで大阪市の定例会議。夜、なにわと築港ARCスタッフオープンミートイング vol.5 開催。今回のテーマは「アーツにまつわるお仕事体験」
- 23日・s x d 2007 協働プロジェクト公演「Fance, pan 公演初日、26日まで。
- 24日・夕にs x d 2007 優秀劇団選考会。それぞれの視点で評価。
- 25日・s x d 2007 クロージングトーク。今年の優秀劇団に突刺金魚を選出と発表。
- 26日・自然夏のついで。
- 27日・金時鐘氏の詩朗読「詩の夕へ2007夏」講演。昼に長年

- 27日・金時鐘氏の詩朗読「詩の夕へ2007夏」講演。昼に長年
- 28日・夏「講演。昼に長年
- 29日・夏「講演。昼に長年
- 30日・夏「講演。昼に長年
- 31日・築港ARC月例トークサロ

- ン。vol.6開催。「日常現象への視点」発明家とアーティストの巻」。ゲストはの六車義方氏(乗り物発明家)と自作の音ツールの制作を中心に活動するアーティストの梅田哲也氏。

9月

- 1日・悲願華火公演初日。3日まで。
- 4日・築港ARC月次会議。夜には主幹が水都大阪2008の会議。
- 8日・10年誌の関東対談で上田紀行さんが来山。夜は沖繩料理。
- 10日・浄土宗法然上人800年第遠忌事業「共生・地域文化大賞」。住職、主幹が知恩院へ。
- 11日・音響システム入れ替え、12日まで。夜、應典院にて大阪でアーツカウンシルをつくる会「日本型アーツカウンシルの課題と展望」開催。ゲストは小高喜夫さん。
- 13日・若い演劇人のための基礎講座開催。特別講師として宮城聰

- 氏を迎え、本堂にて開催。昼にはワークショップ開催協力で生
- 15日・演劇空間無限軌道公演初日、16日まで。
- 17日・朝から水都2008の会議に主幹が出席。夜には第4回仏教講座「ダンマパタ」が教える日常生活の倫理」を大蓮寺にて開催。
- 18日・下半期應典院全体会議。
- 20日・第71回いのちと出会う会「運命は変えられる」開催。講師は企業コンサルタント&個人カウンセラー梅澤千雅子さん。
- 21日・朝、pianoで大阪市との定例会議。吉田商店公演初日、23日まで。
- 22日・築港ARC月例トークサロンのvol.7開催。テーマは「地図と記憶」。ゲストは森洋久氏(地図情報学者)と松本篤氏(emo)。
- 24日・第50回寺子屋トーク「市民の時代のスピリチュアリティ」開催。ゲストに島園進氏(東京大学大学院教授)と関嘉寛氏(大

- 大阪大学コミュニケーションデザ
- イン・センター教授)を迎える。
- 27日・10周年記念誌のための「應典院の一日」撮影。朝のお勤めから夜のインド舞踊まで。
- 28日・自由派DNA公演。30日まで。夜には住職と主幹がアトリエインカープによる船場のギャラリーオープンパーティーに駆けつける。
- 29日・築港ARC出張企画「in アップルストア心斎橋。関西の実験的なアートスペースイベントの紹介だけでなく、番組に出演を控えているミュージシャンによる音楽ライブも開催。
- 30日・アーツなお仕事研究会。信田秋田光彦と詩人・上田假奈代による公開取材講座。築港ARC「ことばを使った自由表現ワークショップver4」開催。4月から始まった「ことば」シリーズのワークショップがついに最終回。

10月

- 2日・第1回スタッフ仕事研修。

- テーマはビジネス文書の作り方。
- 4日・「朱霊たち」大阪上映特別イベント開催。監督であり舞踏家でもある若名雅記氏の舞踏に圧巻。二部では若名雅記監督、秋田住職、上映企画者、映画ライターの高多匡希による三者対談。
- 6日・午前主幹が大阪市総合医療センターのシンポジウムでエンゼルメイクと看取りについて講演。築港ARC新トーク企画「大阪のアートを知り尽くすの会」開催。
- 7日・クリンもたん美術展2007開催。20日まで。7日(シンポジウム)「知的障がい者の生きる力の可能性」開催。
- 8日・コミュニケーションシナミシリーズvol.11「終わりよければすべてよし」を上映。二部では桜井隆氏(さくらいクリニク院長)と秋田住職の対談「あなただけの家にかえる」を開催。
- 9日・emoにてアーツカウンシルをつくる会。ゲストはアサヒピールの加藤種男さん。

- 10日・野村タマさんの撮影写真展開催。連日、ゲストとの対談も。秋田住職もゲスト出演。14日まで。築港ARC「運き出す表現ワークショップ喜連小学校ver」開催。
- 24日・朝、pianoで大阪市との定例会議。
- 25日・應典院バックアッププロジェクト「Space + aenal」シアターシンクタンク万国公演初日、28日まで。
- 27日・築港ARC月例トークサロンの「ARCTORコンプレッション」開催。テーマは「痛み」の哲学。接触の技法contact gongoの実践。ゲストはcontact gongo (アーツユニット)。主幹は国民文化祭「上勝アートプロジェクト」シエクト「見字で徳島へ帰る」。
- 29日・大阪府佛教青年団「目覚めよ仏教」タライ・ラマからのメッセージ」開催。上田紀行氏(東京工業大学准教授)の講演。
- 31日・大阪市住まい情報センター来訪。ウエブ関係で連携の協議。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第73回 11月15日(木)
「嘆きの中で見つけた感謝という魔法」

話題提供者：入江富美子さん
(映画プロデューサー & 監督)

※ 第3木曜日 18:30～20:30。

参加費 会員・学生 700円 / 一般 1000円

寺子屋トーク 51

日本アートマネジメント学会全国大会プレ企画

「アートが変えるくまち」の風景

翌日から應典院で開催される学術会議を記念し、公開企画を実施いたします。北川フラム氏を招いた記念講演を含め、上田假奈代氏らとともに、まちとアートの関係に焦点をあてます。

○日時 11月23日(金・祝)13:30～17:30

○場所 應典院本堂ホール

○料金 1,500円(資料代)

應典院寺町倶楽部会員・学生 1,200円

<同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者は無料>

船井美佐展

「一境界—プラトニックディスク」

○日程 11月25日まで毎日10:00～18:00

○場所：應典院ギャラリー(1F、2F)

○入場無料

※ギャラリートーク

「<いのち>の臨界を見つめて」

○秋田光彦(大蓮寺・應典院住職)×船井美佐

○日時 11月23日(金・祝)13:30～14:15

今年度も開催! コモンズフェスタ

2008年1月12日～25日開催

・12 オープニングトーク。

・12～13 映像発信てれれ。

・20 映画おしゃべり会スペシャル

・23～25 劇創ト社 with Lowpowers 公演。
(10月15日時点、確定分)

アートNPOのサポート施設

築港 ARC (アートリソースセンター by oudenin)

「映像温泉 in 築港」

～銭湯で髪を乾かすその合間

心身はぐしてビデオ鑑賞～

われらが築港 ARC が存在するここ大阪市港区築港地区には「築港温泉」という歴史ある銭湯があります。この度は、「映像発信てれれ」とタッグを組んで築港温泉脱衣所のテレビをジャック。テレビ番組とは一味も二味もちがう市民の手で作られたビデオ作品の終日上映を開催します。お風呂あがりにピッタリの癒され作品やちょっぴり風刺の利いた笑える作品からアニメーションまで。是非、牛乳片手にごゆっくりご鑑賞ください。

○日時 11月3日(土)～11月11日(日)

○時間 15:00～24:00

※ 11/3、11は13:00～16:00、18:30～21:00に上映。

○参加費 無料

(※入湯料を頂きます。土曜日のみ無料。)

○会場 築港温泉(大阪市港区築港 1-9-23)

應典院主催・應典院寺町倶楽部協力事業

「自分感謝祭」

應典院が贈る1年の締めくくりの場「自分感謝祭」。毎年12月26日に行われるこの催しは、去りゆく年と自分自身を供養する独自の様式での音楽法要です。自分に対する感謝の気持ち、他者に対する懺悔の思いをことばにしたためて、この1年を振り返ってみませんか?

○日時 12月26日(火)(1時間程度の法要)
1回目14時～2回目18時～

<いずれも同じ内容です>

○場所 應典院本堂ホール

○内容 秋田光彦(大蓮寺・應典院住職)

による法要。オルガン演奏は藤田

礼子さん。2回目終了後交流会(参

加者は食料品1品ご持参下さい)。

○料金 無料(交流会参加者は1000円)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.54

<次号 55号は…>

2008年3月発行予定

【特集】：次の10年に向かって
～10周年記念事業とコモンズフェスタ～

次の10年に向かい、始動する應典院。2007年の秋から年末にかけておこなわれる10周年記念事業の総括と、新たに開催時期を年の初めに移した新生コモンズフェスタを通じ、これからの應典院の方向性を探ります。

- 発行日 2007年11月10日
- 発行人 秋田光彦
- 編集人 山口洋典
- スタッフ 池野亮光 城田邦生 塩根春華 森山博仁 朝田亘
- 発行所 應典院寺町倶楽部 〒543-0076 大阪市天王寺区下寺町1-1-27 TEL 06-6771-7641 FAX 06-6770-3147 E-mail info@outenin.com URL http://www.outenin.com

編集後記

今号は、真夏の演劇特集。いかがでしたでしょうか。space × drama、HPF、その間にも寺子屋トークありのおおいに盛り上がった應典院の2ヶ月でした。少しでもその熱気をお伝えすることができていたら、嬉しい限りです。(城田)

Space × dramaで演劇を観て以来、舞台を観たい熱が再燃しております。色々な小屋に出発中です! 秋はARTの展覧会も多いので、こちらもさすらい旅する予定です。(塩根)

演劇に携わり、もうすぐ7年になります。應典院のスタッフになり、HPF、space × drama2007を経て、演劇に対する携わり方が以前より濃密になってきました。さまざまな角度からの視点を大切にこれからも演劇を盛り上げていこうと思います。(森山)

最近、「アートの守備範囲」について考えることがよくあります。築港ARCの立ち上げ期から早1年。思えば、アートが社会に関わっていく事例の収集や実践を繰り返すうちに、自分の中でアートの概念をくり返し編集しているのだと感じる日々です。(朝田)

復刻版シリーズ、第3段は、A4版時代の最終世代のものであり、ちょうど、今回掲載分の連載「應典院10年史」で取り上げた時期と重なる時代です。実は今回の「10年史」の連載、これまでの2回よりも分量が多いのですが、それだけ、取り組みに厚みがあった、とお許しただければと思います。それに対して、今回から、全体的に文字の量を少なくし、行間等も空け、より読みやすさに配慮をしたつもりです。その背景にはスタッフ会議の中で、いささか読みにくいのではないかと問題提起がなされたことがあり、それゆえ、城田さんがまずレイアウト、その後私が調整をするという方針としたためです。皆様により深く、そして心地よく読んでいただけるよう、工夫を重ねます。(山口)